司会：井上先生、ありがとうございました。続きまして、指導・助言に移ります。ここからは、司会進行を名西高等学校高曽根浩三教頭先生にお願いいたします。
高曽根：それでは、指導・助言をいただきたいと思いますが、その前に指導・助言を担当してくださる先生方、ならびに記録を担当してくださる先生方の紹介をいたします。まずは、富岡西高等学校の発表に対しまして、指導・助言ということで、徳島県教育委員会学校教育課学力向上推進室担当指導主事の佐野恵里先生です。それから、徳島市立高等学校の発表に対する指導・助言ということで、城東高等学校教頭の安藝恭子先生です。それから記録を担当していただく先生方は、富岡西高等学校の岩佐美紀先生、徳島市立高等学校の三木千代枝先生にそれぞれお願いしております。よろしくお願いいたします。なお、事前に出していただきました質疑につきましては、国語学会のホームページで回答を掲載させていただきます。そちらでご確認をお願いいたします。それでは、具体的に指導・助言をいただきます。まずは、富岡西高等学校に対しまして、佐野先生、よろしくお願いいたします。
佐野：よろしくお願いいたします。富岡西高等学校、徳島市立高等学校の２校の先生方、研究発表では大変お世話になりました。本年度から新学習指導要領が年次進行で実施されていることに伴いまして、各校においては、生徒が卒業するまでに身につけることを目指しつつ、能力の育成に向けて、主体的、対話的で深い学びの視点からの授業改善やカリキュラムマネジメントの充実に取り組まれているところだと思います。主体的、対話的で深い学びの視点で授業改善をおこなっていくうえにおいては、学習評価が重要な役割を担っております。日々の授業においては、教員が自らの指導の狙いに応じて生徒に学習を振り返り、生徒の学習や教師による指導の改善を図る指導と評価の一体化を進める必要があります。特に観点別学習状況の評価については、生徒の学習状況をどのように見取り、どのように評価するかということを、各校で協議、検討されながら工夫、改善を進めていると思いますが、いまだに手探りの状況にあるというのが実情ではないでしょうか。このようななか、観点別学習状況の評価について研究を進めていただきました２校の取り組みは、私たちに大きな示唆を与えていただける大変貴重なものであったと思っています。日々のお忙しい教育活動のなかにおいて、計画的に取り組んでいただきまして、誠にありがとうございました。
　それでは、富岡西高等学校の発表に関しまして、今後私たちが観点別学習状況の評価を進めていくうえで、ぜひ参考にさせていただきたい点について述べたいと思います。１点目は、目標となる生徒につけたい力を明確にして、生徒の実態を把握したうえで、その力を身につけさせるための授業を繰り広げている点です。富岡西高等学校で評価に関する研修があったと思いますが、そのなかで評価とは、まずは目標が明確であって、はじめて意味をなすものであるという言葉がありました。授業を計画していくうえで、目標が非常に重要だと思います。予測困難で複雑な社会で生きていく生徒たちに、卒業までに身につけさせたい力、資質、能力は何か。新学習指導要領をもとに、各学校で作成した目標が明確であることが重要ではないでしょうか。卒業までに身につけさせたい目標にたどり着くために、２年生ではこれ、１年生の目標はこれ、また、国語科で卒業までに身につけさせたい力は、また、卒業ま

でがそうなってくると、２年生の国語科の目標、１年生の国語科の目標というふうに、細かく設定できていくと思います。また、現代の国語、現国科の目標は、それからこの時期、この単元、この内容のまとまりでどのような力を身につけさせたいのかということが決まってまいります。その目標をかなえるために、その資質能力を生徒たちに身につけてもらうために、どのような手だて、どのような言語活動を通していくのかということを決めていくことがつながってくると思います。学習評価を考えていくうえでは、やはり目標が明確になると、その目標に向かってどうしていけばいいのか、教員が取った手だて、方向が適切だったのかということを、どうしても反省できない部分が出てくるかと思いますので、ぜひ評価をするうえで困ったときには立ち止まって、今回の授業の目標はなんであったのか、その目標に向かって学習を進めていくためには、どのような手だてを改善していけばいいのかと考えていただければと思います。

２点目につきましては、評価の場面を精選し、その評価の視点が生徒にもわかるように提示されていることです。富岡西高等学校さんでは、ルーブリックを活用されていますが、このルーブリックを通して生徒にできるようになってほしいことが生徒に伝わり、生徒自身もできるようになったことがわかります。また、自分にまだどのような力が身についていないかがわかるということが大事になってきます。それを通して、今後の学習を通して、自分がどのような力を身につけていけばいいのかということを、自分の学びを自己調整して、また粘り強く学習に取り組んでいくことにつながると考えています。このルーブリックにつきましては、先生方も実感されていると思いますが、お一人で作成するのは非常に難しいと思います。ぜひ教科の先生方で教科会議を開いたり、もしくは授業の前に複数の教員の方で相談をして、評価の観点、それから評価の基準について共有化する必要があります。やはりお一人の力では限界がありますし、また、お一人がなんとなくしていた評価というものを、かたちとしてルーブリックにする、もしくはラインのまとまりの計画とすることで、非常に明確になると思います。ぜひルーブリックも含めて、学習の内容をどのように計画するのかということを事前にお話しいただきたいと思います。

３点目につきましては、振り返りシートを使っておりましたけれども、生徒の主体的な学び、学習に向かう態度を身につけさせるために、実生活と結びつけて考えるという。読みの深まりを身につけさせるために、このような取り組みをされているところも素晴らしいと思いました。どうしても一つ一つの力というかたちで細切れになってしまいますと、国語科としてどのような力を身につけさせたいのかということがわかりづらくなってきます。ですから、一年間を通して身につけさせたい、築いてもらいたい力というものを明らかにするということが非常に大事だと思いますので、今後も取り組みを続けていただきたいと思います。

今回の観点別学習状況の評価につきましては、各学校でいろいろと工夫しながらやっていると思います。先ほども申しあげましたとおり、学習状況の評価を個人の先生方がお一人でおこなうのは非常に難しいかと思います。ぜひこのような会を通じて、各校の取り組みを

共有していただきまして、自校の取り組みに生かしていただきたいと思います。感想のようなかたちになりましたけれども、富岡西高等学校さんの取り組みは、各学校の実情に応じたかたちで取り組み、各学校の評価を進めていくことをお願いしたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

高曽根：ありがとうございました。続きまして、徳島市立高等学校の発表に対しまして、安藝先生、お願いいたします。

安藝：失礼いたします。城東高等学校の安藝です。私も少しお時間をいただき、ご発表についてのお話をさせていただきます。まずは、今回のご発表につきまして、徳島市立高等学校井上先生、ならびに国語科の先生方には、貴重な取り組みと分析を実施していただき、この場をお借りしてお礼申しあげます。

さて、今年度より高等学校においても、観点別評価が本格的に実施となりました。個別最適な学びを保障していくためにも、観点別評価が必須であることは、皆さんもご承知のことと思います。一方で、観点別評価の実施にあたっては、学校の実態に合わせた評価基準の作成とともに、自校の観点別評価のあり方について、生徒や保護者にどのように理解を進めていくかなど、昨年からの準備段階から課題が多く、その業務負担と効果については、さまざまなご意見が交わされていることと思います。悩み多き状況ではありますが、ご発表のなかにありましたように、生徒は国語で身につける力を、自分の考えを言葉にして、相手に正しく伝える力や、いろいろな角度から、社会の出来事や他者の考えを捉える力などとして、国語力を生きる力として捉えることができており、必要不可欠なものとして考えていることが明示されておりました。観点別評価の実施にあたっては、授業で身につけるべき力と、その評価基準を生徒と共有することがまずは大事であります。生徒自身が単元や毎時間の目標を理解することが、主体的に取り組む姿勢につながると思います。そのためにも、年度当初に国語力とはなんたるかをしっかり考えさせたことが、大変有効であったのではないでしょうか。

さて、記述問題の実践と評価に関する取り組みが持たれ、添削の際の負担と、評価の揺れが問題視されておりました。効果的で揺れの少ない評価のためにこそ、ルーブリック等の評価基準の抽出が重要かと思います。学校の実態に合わせて、教科内での協議を重ねて、より実効性のあるものにしていく必要があります。先の富岡西高等学校さんのご発表にもありましたが、時間をかけたルーブリックによる自己評価により、国語力の養成がしっかりと成されたことが検証されておりました。国語力を具体化することで、生徒自身ができるようになったことを意識しやすくなり、主体的な学習につながったというご報告からも、われわれ教員が協働し、評価基準をより具体的でわかりやすいものに改善することが重要なのではないでしょうか。

この会に先立ちまして、観点別評価が進む中学校を訪問させていただきました。その学校では、すべての教科や教育活動において、自己調整力の育成を目指されているということでした。主体的に取り組む態度を育成するためには、自分の現状を正確に把握し、改善するこ

とが重要と捉え、全教職員で取り組みをされていると伺いました。そのなかで国語科としては、単元ごとの目標を生徒にしっかりと説明し、毎時間授業の冒頭で、本時の目標を伝えたり、授業の途中であっても、その時間につけたい力を明示したり、わかりやすい評価を心がけられているということでした。その結果、１学期終了後、多くの生徒たちは自分の取り組みが目標の達成にはまだ近づけていないということをしっかりと自己認識し、夏休み中の取り組みとして、学習方法の見直しを図っているということでした。また、自己評価を信ぴょう性のあるものにするために、終業式の校長訓話のなかで、自己調整のあり方や重要性を話されるなど、あらゆる場面を捉えて主体的に取り組むということを生徒自身に考えさせているというお話をいただきました。学習するうえでの目標の明確化と、実効性のある評価基準を作成することで、私たち教員にとっては、よりよい授業の実践につながりますし、生徒にとっても授業理解と自分自身の課題の理解につながると思います。

ご発表のなかで、定期考査の振り返りアンケートを実施され、返却の際に、問いかけにも気を配られているというお話がありました。丁寧に生徒に伝えていくという点では、高校も、先ほどの中学校同様の取り組みがおこなわれており、生徒の主体的な取り組みとしての自己調整力の育成が期待できると思います。先ほどのご講演のなかで、角田先生が小説を書く際のもがきについて語ってくださいましたけれども、新たなものを生み出す際のもがきにも似た苦労が、今回の観点別評価の取り組みにもあるように感じます。教科担任一人では苦しい取り組みではありますけれども、学校内での協働を通じて、指導と評価の一体化を進めることが効率のよい授業改善につながるのではないでしょうか。本日のお２人の先生方のご発表を参考にさせていただきながら、私自身も指導や評価のあり方について、再度見直したいと思っています。各学校での取り組みにも反映されますことを願いつつ、国語学会の皆さまとともに、今回の研究発表に取り組んでいただいた先生方に、再度お礼を申しあげたいと思います。本当にありがとうございました。

高曽根：ありがとうございました。以上をもちまして、研究協議に代えた指導・助言の時間を終了いたします。

司会：それでは、閉式の言葉を、副会長の中﨑誠海部高等学校校長が申しあげます。

中﨑：以上をもちまして、令和４年度徳島県高等学校教育研究大会国語学会のすべての日程を終了いたします。毎日の活動のなかで、いろいろと大変なことがたくさんありますし、それから困難なことも次々と出てまいります。ですが、皆さんと力を合わせて、よりよい明日のために、生徒のために頑張っていきましょう。長時間にわたりまして、大変お疲れさまでした。どうもありがとうございました。（終了）